

患者が変われば 医療が変わる
医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
 C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、Iターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第54回 在宅医療のゆくえ

本紙にも掲載されている「第14回在宅医療推進フォーラム」のちのバトン地域が想いを紡ぐ」が、来る11月23日、東京ビックサイト国際会議場で開かれる。勇美記念財団主催の行事で毎年開催されているが、参加者は大半が医療者で本気

在宅で過ごす意味 芝居で問う

医療

で在宅に取り組んでいる先生方。私自身が患者として4年連続で参加しているが、私にとって大切な学びの場である。特に市長、区長、町長と医師会長が登場して、全国から集まって来る1000名を超える参加者の前で地元の在宅医療の推進に関する話しをする勇氣は称賛に値する。この企画は数年前から継続して、毎年新しい地域のトップが現れる。

劇団「ザイタク」による「お一人様でも、自分の家でピンピンコロリできるんで!」のDVD上映会も興味深い。関西地域の医師たちが演じる。今回は短縮版26分を使うらしい。プロデュースは3年前、夕張市崩壊後、尼崎の長尾先生。在宅で診療所を運営していた森週ごす意味とノウハウを田先生をお呼びした。当教えてくれる。このDVDをも夕張市の二の舞にならぬようにと思い、話し、行政担当、病院担当しをして頂いたが大失敗。地元「在宅医療」への意識の低さを痛感した。

自分たちが安心して、慣れた地域で暮らすにはどうすればいいかを、もっと真剣に考えなければ将来は危ない。他人事として捉えず、自分自身・家族のこととして地域医療・看護・介護の面からしっかりと考えるべきだろう。そうでなければ死ぬに死ねない。地元を憂うる気持ちをいつまでも持ち続けている。

美記念財団からは数回助成金も頂き、地元益田市へ沢山の先生方をお呼びして「在宅医療」について講演会を開催して啓発を行ってきたが、一向に成果が上がっていない。